

1 はじめに

本校は病弱者の特別支援学校であり、身体の病気又は心の病気のため継続的又は繰り返し医療や生活規制を必要とする児童生徒が在籍している。病気の状態や心理的な側面から登校することが難しく、本校入学前の学校で学習空白が生じているケースが多い。自身の病気の症状により思うような生活ができず落ち込んだり、心の病気のため集団生活に対して大きなストレスを感じたりすることに加えて、特に中学部の生徒は思春期を迎え気持ちが不安定になりやすい。そのため学習意欲はあっても登校ができず、登校できない日が多くなると学習の遅れに対する不安が生じ余計に登校がしにくくなる、といった悪循環に陥っている。

また、本校には感染症に罹患すると、その後長期に渡り療養が必要になる生徒がいる。そのため、新型コロナウイルスやインフルエンザ等の感染症が流行する時期には予防のために登校を見合わせることもある。そこで中学部教務主任として、病気を抱えながらも生徒が学習を継続できる体制を学部として整えることを目指した。またその上で、生徒個々が抱える思いを表現できるよう、授業実践を行ってきた。

2 実践内容

(1) オンライン授業・オンデマンド授業のための体制整備

病気療養児に対する ICT 等を活用した学習活動について、本校として必要な支援であると考えた。義務教育段階での効果的な取り入れ方について、令和4年度に小学部の教務主任とともに案を作成し、それをもとに小学部、中学部の会議にてそれぞれ意見を募った。遠隔授業を実施するにあたり、以下の意見が挙げられた。

<メリットや期待できること>

- ・教科等の学習を進めることができる。
- ・先生や友達とつながっているという安心感が得られる。
- ・オンライン授業等で学校の様子を把握できるので、久しぶりの登校であっても学校生活に見通しがもてる。

<デメリットや心配なこと>

- ・心理面で登校が難しい生徒については「オンラインをしているから学校へ行かなくていい」という気持ちが強くなり、ますます学校から足が遠のくことが懸念される。
- ・誰が、どのような判断をしてオンライン授業等を決定するのか。
- ・実施期間はどうか。
- ・オンライン授業等を実施する生徒としない生徒の線引きはどうか。不公平感を訴える児童生徒や保護者への対応が必要になるのではないか。

↓
デメリットや心配される点については検討を重ね、以下のように定めた。

- ① オンライン授業、オンデマンド授業を実施するかどうかについては、児童生徒の学習意欲の高まりや心理的安定が期待できる場合に実施する。欠席の背景や病状等について十分に把握し、より慎重に学部会で話し合いをもつこととする。
- ② 実施期間は、登校の見直しを確認しつつ、本人、保護者、関係機関等と連携して決定する。開始後も期間の見直しを適宜行う。
- ③ 定期的に家庭訪問を行う。

(2) オンライン授業・オンデマンド授業の実際

機器の操作の課題や、取組に対する教員側の気持ちをまとめ、方向性を定めて体制を整えるために、段

階を踏む必要があるため、3つのステップを踏んだ。

Step 1 校内でオンライン授業

集会活動は感染リスクが高いため、必要な生徒のために、まずは校内の教室間にてオンライン授業を実施することからスタートした。児童生徒会役員選挙へオンラインにて参加することで欠席せずに済み、活動することができたという満足感を生徒自身が得ることができた。



【配信】



【受信】

学部の教員間で協力体制をとり、事前に役割分担をし、連携を図りながら実施した。また他の生徒には、各担任から「体調の面で心配があるので教室で参加しています。」という説明をすると、すぐに状況を理解し納得した。生徒はそれぞれ持病があり、自身の経験上、病気に対する対応には様々な配慮が必要であると理解しており、友達のオンライン授業の実施についてもすぐに受け入れることができた。

Step 2 オンデマンドにて授業配信

体力がもたずに早退をする生徒など、授業を継続して受けることが難しい生徒に対して、オンデマンドで授業配信をしたり、授業内容がわかる画像を送信したりした。(アプリ「class room」使用)



左は、私が担当している国語の授業においてアプリ「Google Classroom」にてやりとりをした様子である。

早退をした生徒が自宅で添付ファイルを開き、授業での新聞作りの進捗を確認している。生徒達のコメントは、「明日頑張ります」「ファイト」など、前向きな言葉が並ぶ。生徒同士のコミュニケーションの場にもなった。

授業内容に見通しをもつことができていることから、登校できた際にはスムーズに新聞作りに取りかかることができた。

この事例を担当や各教科担当教員と共有し、Google Classroom の効果的な活用方法について随時話し合った。欠席した全ての授業を Google Classroom にて生徒に配信することは、生徒の体力の面で負担になることや、心理面で焦燥感や不安感をかきたててしまう恐れがあるという共通認識をもった。どの授業を配信するかについては、担任が本人及び保護者と話し合い、調整をしていくことになった。

Step 3 自宅にいる生徒とのオンライン授業

令和5年度に、Step 2まで実践できたことを踏まえ、令和6年度からはいよいよ自宅にいる生徒とのオンライン授業を実施することとなった。Step 2までの実践で、生徒も教員も遠隔授業を実施するための手順やどのような場合に実施することが効果的かを捉えることができていたため、自宅とのオンライン授業は円滑に取り組むことができた。



病状により戸外での活動は難しい生徒が、地域の伝統的な祭りである「松明あかし」の学校行事へオンラインにて参加した。祭りの会場へタブレット端末、ポケット Wi-Fi を持っていき、自宅へいる生徒へ無事配信することができた。

また別の生徒には、音楽の授業をオンラインにて行った。オンラインで参加した授業については、本人の感想も含めて担任が記録をとっており、評価の対象とすることができた。

【オンライン実施前の評価】

<ul style="list-style-type: none"> ○歌唱「旅立ちの日に」 ○鑑賞「オペラ(アイーダ)」 ○創作「リズムパターンをつくらう」 	
学 習 所 見	
授業に参加することができなかった。	

【オンライン実施後の評価】

<ul style="list-style-type: none"> ○器楽「リコーダーで表現しよう」 ○歌唱「浜辺の歌」 ○楽典 	B A B
学 習 所 見	2 年
オンラインも含めて出席の機会を増やすことができた。定期考査では、与えられた課題をしっかりと行い、理解を深めて結果につなげることができた。特に楽典では、記号の読み方や意味をしっかりと押さえることができていた。	知識・技能 思 B

(3) 個に応じた指導をするために～自立活動の指導の充実～

教育的ニーズを踏まえ個に応じた指導を行うためには、特別支援学校の指導の土台となる「自立活動」の指導目標や指導内容の設定が重要であるため、自立活動の指導の見直しを行うこととした。

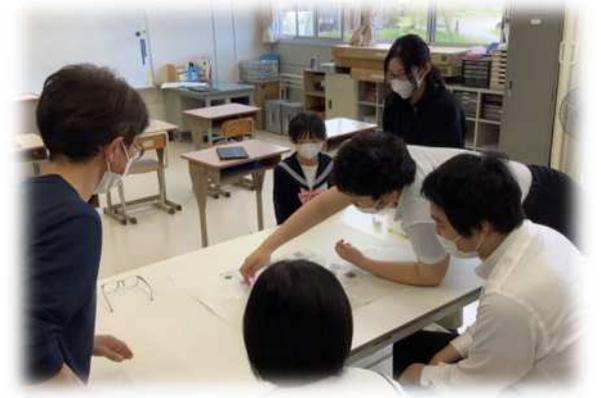
①自立活動の個別の指導計画の様式変更

実態から課題の抽出、目標、指導内容へと関連付けて設定できるような様式へと変更した。

②作成した個別の指導計画の活かし方を検討

「スタッフ会議」を定期的を実施し、生徒の実態把握等を行っているが、これまでは個別の教育支援計画をもとに話し合いを行っていた。自立活動の指導計画を中心とした話し合いをもつように変更した。

上記①、②により、指導内容を学部教員全員で考え、より個に応じた指導ができるようになった。特に、「スタッフ会議」での活用は、話し合いの焦点化ができるようになり、有意義な時間となった。



【自立活動の授業の様子】

3 実践の成果と課題

大きな成果としては、登校することが難しい場合でも工夫をすれば学習が継続できるということ、生徒も教員も実感できたことである。何のために、どこで、どのような学習をするのか、教員側からの一方向ではなく、生徒と相談をしながら進めてきた。その結果、あえて遠隔の授業を行わなかったケースもある。

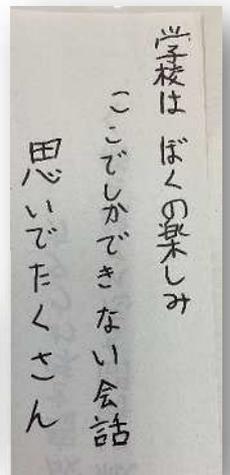
また、「生徒の学びをなんとかして継続させたい。」という思いをもって取り組んできた。それは学部教員全員の願いでもある。そのため、生徒の学びを保障するために教師間で話し合い、実践を重ねながら学部の指導体制を整えてきたことで、教員間での理解が深まり、協力し合うことが増えた。生徒の病状や心理的な状態などを的確に捉えるために教員間のコミュニケーションが増え、生徒理解において多角的な視点をもつことができた。これらは自立活動の指導を大切にしてきたことと大きく関連していると考えられる。

学びの場の多様化により、生徒においては学習意欲を持続でき、安心して生活を送ることができる材料の一つとなった。学びの場が複数あり選択できるということは、自分を表現できる場があるということにつながった。生徒は少しずつ自分の思いを表現できるようになり、不登校だった時の辛かった思いを文章で述べ、発表した生徒もいる。

世の中には 傷つける人と傷つけられる人がいます。皆さん、頭がおかしい奴はどちらだと思えますか。それはもちろん「傷つける人」です。そんな人になるよりも、人の心を持った人間である方がよっぽどマシです。この言葉を読むと ちゃんと人の心を持っている僕はえらい と思えます。

【登校できなかった日々を思い出して書いた文章】

一方、課題としては、病気の影響で学習に対し意欲をもつことができない場合もある。学校とつながる糸口を見出すことが難しいケースもある。また、卒業後の進路についても課題が残る。福祉や医療と連携を図りながら今後も取り組んでいきたい。



【入院や自宅療養で登校日が限られている生徒の作品】